

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：51303

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12417

研究課題名（和文）外国人接触時の調整コミュニケーションにおけるコミュニケーション機能別位相の解明

研究課題名（英文）Analysis of variations in coordinated communication when communicating with foreigners

研究代表者

梅木 俊輔（UMEKI, Shunsuke）

仙台高等専門学校・総合工学科・准教授

研究者番号：80756247

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語母語話者が外国人と話す際に分かりやすく伝えるための調整コミュニケーションについて、依頼や勧誘といったコミュニケーション機能ごとに、相互行為の在り様を解明することを当初の目的としていた。しかし、コロナ禍の影響により、対面での会話データを収集できる見通しが立たなくなったため、研究計画を変更し、オンライン環境での会話を分析することとした。本研究では、外国人接触場面の調整コミュニケーションを実践的に学ぶ場として、オンライン日本語会話セッションを企画・実施した。また、留学生を支援するチューター育成の観点から、調整コミュニケーション能力の向上が有用なスキルとなることを提言としてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、オンライン日本語会話セッションを実践し、これまでに外国人接触場でコミュニケーションを調整した経験を持たない者でも、語学力や文化の違いに直面した際の相互理解に役立つコミュニケーションの調整法が実践的に学べる機会を提供した。さらに、本実践の参加者が、いかにお互いのコミュニケーションを調整しつつ、相互理解を確立しているかを明らかにした。本研究は、調整コミュニケーション能力の向上が、多様な言語・文化的背景を持つ人々とつながるために有用なスキルとなることを具体的に示す点で、留学生支援の一環となるチューター育成に寄与すると考える。

研究成果の概要（英文）：In the field of Japanese language education, the behavior of native speakers has been regarded as a norm that learners should have to realize smooth communication. However, as opportunities contacting with foreigners have increased, the difference in communication between those who can communicate with foreigners in easy-to-understand Japanese and those who cannot (Iori Isao, Lee Yonsuku, Mori Atsushi, 2013, "Yasashii Nihongo" wa Nani o Mezasuka: Tabunkakyooseeshakai wo Jitsugen suru tame ni, Koko shuppan.). Regarding the participants, the Japanese level of the Thai technical college students is generally the first half of intermediate level. Our practice considers communication coordination when native Japanese speakers talk to foreigners as one of the ways of using Japanese that native Japanese speakers should learn, which is part of training for supporters of learning. It provides a useful case for native speakers to learn how to coordinate their communication.

研究分野：応用言語学

キーワード：外国人接触場面 調整コミュニケーション オンライン通話 ピアチュータリング 留学生支援

## 1. 研究開始当初の背景

日常での外国人との接触機会が増えるにつれ、分かりやすい日本語で外国人と意思疎通が行える者とそうでない者との間にみられるコミュニケーションの取り方の相違が注目されるようになってきた。応用言語学・日本語教育学では、外国人との接触場面におけるコミュニケーション方略が注目を集めており、研究者のみならず、政府や地方公共団体、国際交流協会関係者の間でも、外国人に情報を分かりやすく伝えるための公的文書の書き換えや、口頭面での調整を支援する取り組みが進められている[庵功雄・イ ヨンスク・森篤嗣(2013)『「やさしい日本語」は何を目指すか 多文化共生社会を実現するために』, ココ出版.]。しかし、これまでのところ、コミュニケーション方略の研究は、「意思疎通の問題解決」という視点からの検討を主としており、「コミュニケーションを効果的にする」という視点からの検討に乏しい。ゆえに、学習者の言動に対する問題視に終始することなく、日本語母語話者からの歩み寄りとしての調整コミュニケーションの支援を充実させていくには、「意思疎通の問題解決」という視点から検討するばかりでなく、「コミュニケーションを効果的にする」という視点からの検討が不可欠となる。近年の日本社会における多文化化の進展に伴い、日本語母語話者が調整コミュニケーションによって果たし得る役割は、学校や地域社会において、いっそう強まっており、あらためて調整コミュニケーションの包括的研究が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本語母語話者が外国人と話す際に分かりやすく伝えるための調整コミュニケーションについて、依頼、勧誘、助言等、コミュニケーションを通じ達成する機能を軸とし、それぞれの相互行為の様相を外国人接触場面と日本語母語話者同士による場面の双方の比較を通じ解明し、日本語母語話者による調整コミュニケーションの位相として体系的に検討していくための枠組みを構築することである。この目的を果たすため、外国人接触経験の程度(乏しい・豊か)、日本語学習者の日本語レベル(初級・上級)、ロールプレイ場面(依頼・勧誘・助言)の組み合わせが異なる二者間の対面会話 48 組(録画データ)と日本人同士による対面会話 12 組(録画データ)の収集を予定していた。しかし、録画データの収集後、録画データの収集が完了する前に、令和 2 年 2 月以降に発生したコロナ禍の影響により、これまでと同様に対面による会話を録画データとして収集することが不可能となった。そのため、研究計画を大幅に変更し、オンライン通話環境における対話の相互行為分析を行い、外国人接触場面における日本語母語話者の調整コミュニケーションを質的に分析することとした。

## 3. 研究の方法

分析対象となるオンライン通話環境における対話は、東北大学で実施された Zoom を利用し行う対話活動実践「みんなのひろば」[島崎薫・高橋亜紀子・早矢仕智子・ヒューレット柳澤えり子(2022)『日本語教師/学校教員養成課程の学生達のオンラインでの学び 地域の外国人・年少者との実践を通して』村田晶子(編)『オンライン国際交流と協働学習 多文化共生のために』, くろしお出版, pp.235-256.]を参考に、新たに企画・実施した、オンライン交流セッションから得られたものである。この実践には、タイ・日高専の学生が参加した。参加者は、日本語での会話を基本としたが、意思疎通のために英語を使用したり、写真などを画面共有したりすることも奨励し、教える/教えられるという関係性ではなく、誰もが対等につながれる場となることを目指した。実施期間は、2022 年 12 月 9 日から 2023 年 1 月 27 日までである。週一回、18:30-19:00 (日本時間)の時間帯において、全 7 回行った。各回の参加者数は、タイ側の学生が大体 4~7 名程度(最大 9 名)であるのに対し、日本側の学生は 10 名前後であった。各回 30 分の活動の流れは、トピックの説明(ゲーム等、実演を含む)5分 ブレイクアウトセッション(3~5 名のグループ活動)20分 メインルームに戻り 参加者全員による振り返り(終了) 5分 である。トピックにおいては、「無人島に行くなら」、「お菓子(あなたの国では、どんなお菓子が人気ですか?)」、「好きなアニメ、知っているアニメ」等、参加者本人の身近なことや話すことをきっかけとしてお互いを知ることができるように工夫した他、「すごろく」や「絵を描き行うしりとり」といった、自然と発話が生まれるゲームも取り入れた。本実践について、参加した日本人学生からは、「話が進まなくなったり、単語がわからなかったりするのをビビる事なく話すことができました」、「海外の人とお話するのは楽しい事なんだと深く感じました」、「初めて知った文化や食べ物などが交流することでたくさん学べた」等、交流に対する肯定的な意見が多く得られた一方で、「30分はちょっと短いと感じます」、「もっとタイの学生が話せるようなシステムにした方がいいと思います」等、活動時間の短さや発話頻度の偏りを指摘する意見も見られた。

## 4. 研究成果

オンライン交流セッションの実践を通じ、これまでに外国人接触場面でコミュニケーションを調整した経験を持たない者でも、日本語や英語といった語学力レベルの違いや文化の違いに直面した際に、相互理解の確立に活かせる調整コミュニケーションを実践的に学ぶ機会を提供

することができた。さらに、本実践の参加者が、日本語や英語における語学力レベルの違いや文化の違いにいかに向き合い、お互いのコミュニケーションを調整しつつ、相互理解を確立しているかを考察し、留学生支援の一環となるチューター育成の観点から、調整コミュニケーション能力の向上が、多様な言語・文化的背景を持つ人々とつながるために、いかに有用なスキルとなるかを具体的事例に基づく提言としてまとめ、発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 梅木俊輔
2. 発表標題 タイ高専の学生はどのくらい日本語が話せるか
3. 学会等名 2023年度タイ高専編入生の チューター学生研修会（オンライン開催、国立高等専門学校機構本部）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shunsuke Umeki
2. 発表標題 Practical report of cross-cultural online communication between Thai and Japanese colleges of technology: from the point of view of coordinating communication of supporter students
3. 学会等名 16th International Symposium on Advances in Technology Education (ISATE 2023) (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

独立行政法人国立高等専門学校機構 国立高専研究情報ポータル <a href="https://research.kosen-k.go.jp/researcher-list/7000031338/">https://research.kosen-k.go.jp/researcher-list/7000031338/</a>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------